
俺達が生きる理由。

玉椿 寿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺達が生きる理由。

【Zマーク】

N8840Y

【作者名】

玉椿寿

【あらすじ】

俺とあいつの、凸凹生活。

プロローグ

その日は、いつもと変わらない日だった。いや、訂正。変わらない日になるはずだった。そんなこと言つたらあいつは絶対言つだろ？『いつもていつのことだい？毎日全く同じ日なんてありえないことじやないか。そつだろ？君は昨日と同じ時間に起きて、まったく同じ歩幅で歩いて、同じ心拍数で、同じ発音で会話して、同じ回数の瞬きをするというのかい』と。しゃべり出したら止まらないんだ、あいつは。でも自分からしゃべりだすってことはほとんどないから、下手したら一日中しゃべらない日だってあるだろ？そしてしゃべりきつた後は必ず「いつこつんだ。『君は本当にバカだね、』」と。

プロローグ（後書き）

頑張つて書きまーす

凸凹生活？

俺は起きた。直感した。6時だ、と。6時に起きる夢をかなえたんだ！と。

自信満々で時計を見る。きつちり30分遅れた時計を。その時計は無邪気に8のところを指していた。

「…30分遅れているんだから、今は8時半か。」

言つてみたものの実感はなかつた。俺の頭の中では6時に起きたことになつていて。

一分ほどしてやつと状況を理解した。

「は、はちじはん〜〜！？」

あわてて着替えて家を出る。

こういつとき女子だと用意が色々あつて大変だが、男子は楽だ。学校が始まるのは八時三十五分。俺の足なら余裕で着ける。よしつ

…と思つた時、空から声がふつてきた。

「おー、バカにもほどがあるだろ。」

え？

聞きなれた声だった。俺はこの声をいやつちゅうほど知つていて。しかし…空？

変だと思いながらも空を見上げた。バカバカしいほどに美しい空を。

何もなかつた。

「いじぢだよ」

今度は後ろからその声が聞こえた。走る足を止めて後ろを見る。見慣れた顔があつた。

「ハルヒト…。」

空から降ってきた声の主を、俺は知つていて。そして、こいつの性

格が俺の性格と真反対だってことも。

「君は何をあわてているんだい？ 今日も土曜日じゃないか。」

そして、ここには俺の兄弟だつてことも。

電柱のお兄さん。

ハルヒトは、いつもより百倍くらい馬鹿にした口調で言った。

「まぬけにもほどがあるよ。あのすすめすら曜日くらいわかつてゐる
だろうに全く君はなんぞう…（以下省略）」

俺は、頑張つて走つた道をハルヒトの愚痴を聞きながら歩いた。今
回は、自分でも思う。まぬけだ。

にしても…何でハルヒトの声が空から聞こえてきたんだ？謎だ。

「僕は電柱の上から君のまぬけヅラを見学してたのさ。」

ハルヒトがまるで俺の心を読んだかのようなタイミングで言った。
いや、また。いまサラッとすげえこと言つたよな？『電柱の上から
とか。

ハルヒトもよほどの変人だ。こいつと兄弟なんだ、と実感したこと
は一度もない。

俺ですら電柱の上なんか登らないし。

「こんなまぬけと兄弟だなんて…僕は宇宙一不幸な人間だ…！」

と言つてため息をつくハルヒト。と、いつか宇宙つて規模大きいな
つ！

そんなことを話している間に家に着いた。早かつた。

俺とハルヒトが住む家は、一軒家。普通の。

でも裏に空き地がある。俺はそこでいつもサッカーをしている
「ていうかハルヒト、いいかげん俺のこと君つて呼ぶのやめるよ。
名前ちゃんあるんだし…」

俺が覚えている限りでハルヒトは、俺のことを名前で呼んだことが
ない。

「やだね。君に命令されるとか。」

え、そこ?

「あーあと前の名前覚える」とせび無駄なことはないよ。」

俺はキレた。

「兄弟の名前くらい覚えとけええええええええええええええー。」

俺らの家族構成。

ああそりゃう言ひ忘れてた。

俺の名前は山口京介ってんだ。

ちなみに今年で高1。

そもそも双子の兄、ハルヒトは山口春人って書く。

俺達にはあと一人、兄弟がいる。

妹のモミジ。 山口桜。

超黒髪ロングヘアの俺とハルヒトを足して2で割ったような感じ。

1コ下で、今年は受験生だ。

母さんと父さんは仕事でフランス。

ちなみに言つと母さんはついて行つただけ。 僕らをこの窮屈な日本に置いて。

ただのバカ親だと思つ。

まあその分俺は自由に生きてるけど。

家のことはだいたい3人で回してやつてる。

……つてもほとんちは桜と俺がやってるんだが。

ハルヒトは「長男の特権」とか言つてのんきに本を読んでいる」とが多い。

俺もそうしたいところだが、桜一人にやらせるのは気が引ける。
から自動的にやってしまう。

おかげでそこらへんの女子より料理は上手になつた。

洗濯は、桜。

風呂掃除は俺。

「//」任せハルヒト。

よく考えたら洗濯と風呂掃除は毎日あるが、「//」任せ週に2回、
やないか！？

こんな風に畠田が平和に過ごしていい、せめがだった。

凸凹生活？

いつからだ、
ハルヒトはよく寝坊するようになった…。
と、言うか寝る時間が増えた。

毎日俺とハルヒトは2人して枕に起こされている。

「にしてもあのハルヒトが…。」

「はあ、ついに君と同類に…」（以下省略）
なんだかんだいって俺達は仲がいい。
学校へはいつも一緒に来てる。
帰るときは部活の終わる時間が違うから、一緒にじゃないけど。

俺はサッカー部でハルヒトは天文部。
よく似あつてるとと思う、昔から俺はスポーツ系、ハルヒトは勉強系
がすば抜けてよくできたから。

「にしても君の髪の毛は日に日に茶色くなつていいくことないか？」
う…そりやあ染めてるから。

それに比べてハルヒトの髪は純黒だ。枕と似ている
「サッカー部は日焼けすんだよ、んで茶色くなるの。」
「…じやあ同じサッカー部のサエキ君はどうなる？眞っ黒じゃない
か。」

サエキはハルヒトと同じクラスでサッカー部のエース。

スポーツも勉強も人並み以上にできる天才肌。

俺はどう頑張つても勉強は全くできない。

ハルヒトだつて極度の運動音痴だ。

だから両方できるサエキはヒーローだつた。

(まあサッカーは俺にはかなわないけど)

「……ちょっと染めてる。」

「校則違反じゃないか」

チツばれないように地味に染めていつたんだけど……氣づくか、普通。そんなころ、キーンコーンカーンコーン……とチャイムの音が聞こえた。

『あつ』

2人同時に真っ青になる。

やべえ遅刻つ

俺は走れば間に合つけど、ハルヒトは……。遅いから……。

「君は先に行けばいい。僕は遅刻なんて初めてだから怒られないし、

「あ、そり……。

「んじやあお先」

ハルヒトを置いて俺は全力疾走で走つた。
走つた。走つた……。

校舎の俺のクラスの奴らが窓から何か叫んでいた。

びつせ茶化してるだけだろうと思つたが、何か様子が違う。

顔が真っ青な奴らや、女子の叫び声、真顔で何か叫んでいる奴、山口つと俺の名前を呼ぶやつら……

いや、違った。

正確には山口「ハルヒト」のまづの名前を呼んでいたのだ。

俺は反射的に今来た道を振り返る。

『君は先に行けばいい』

遠くなつたハルヒトの体は、交差点の真ん中に横たわっていた。

むなしい嘘。

信じられなかつた。

けどさすが運動部、反射的に俺は走つていた。

「ハルヒトっ！――

このまま信号が、変われば、ハルヒトは…

しかし幸運なことに朝の交差点は車1台も見当たらなかつた。
じゃあ、何故ハルヒトは倒れているんだ？

倒れているハルヒトに駆け寄つて名前を呼ぶ。

「ハルヒトっ　おい、ハルヒトっ」

ぴくりとも動かない。

息は、していた。

そこに保健の先生の佐藤先生と俺のクラスの奴らが来た。
ハルヒトのクラスの奴らもいる。

「先生…っ　ハルヒトを…ハルヒトを…助けてください…――！」

今にも泣きそうな俺に、佐藤先生は言った。

「大丈夫よ、今救急車を呼んだから。大丈夫、軽い貧血よ」

最後のほうの声は小さくなつていた。

(嘘だ。)

そう思つたが、貧血だと信じたかつたから何も言わなかつた。

しかしその嘘はいとも簡単に崩れ去つた。

記憶の力ケラ。

俺は、静かな病室で一人ハルヒトの様子を見ていた。

今にも泣きそうな俺は、かすかに暖かいハルヒトの手のぬくもりで
かるうじて保つていた

ただ眠っているだけのように見える、ハルヒト。

実際そうなのだが、でも細かい意味では違つた。

*

担当の医者である駒井先生は言った。まだ若い、20代後半くらいの男の医者だった。

「保護者の方は？」

「アメリカに行つてます…」

「そうかあ」

やけにのんきにしている駒井先生に俺は聞きたいことがたくさんあつた。

その気持ちを読み取ったのか、駒井先生は「ああ」といつと、ハルヒトについて話しました

「春人君は、大丈夫だ。何も死ぬほどのことではない」

駒井先生は優しい笑顔で言つた。

なぜか素直に信じられた。

「ただね、軽い記憶障害があきて、いる」

「え？」

「いや、その昨日したことを覚えてないとか、食べた物を覚えてないとかその程度のことだけなんだがね」

記憶障害？…。

「でもこれだけは言つておく。春人君は大丈夫だ。しかし、周りの人は、辛いだろう」

「どういう…ことですか？」

「春人君の記憶障害はこれからも進行していく、ってことだ。
それじゃあ・・・ハルヒトは...。」

「いずれ、キミの名前すら覚えていなくなる。」

*

夕方になるころ、ハルヒトが目を覚ました。

「んつ...」

「ハルヒト...無理すんな」

「君に、命令されるのはやだね」

そういうて苦いものを食べたよつた顔をしてからバツが悪そうに笑つた。

「心配をかけた。すまない」

「え?」

今、謝つたのか?

俺が覚えている限りでハルヒトが人に謝つたところを見たことがない。

「栻は?」

「あ、ああ・・・夜には母さんと父さんと一緒に来るよ。」

「そつか」

俺はいまだにハルヒトが記憶障害を負つてこるなんて信じれなかつた。

いや、訂正。

信じたくなかったんだ...。

告白。

「嘘、ついてたんだ。すまない」

ハルヒトは言った。

「気づいてたのか、」

俺が少し驚いてハルヒトを見ると、呆れたように、笑っていた。

「自分の体のことくらいわかる。」

そりやあそうだろうなあ

「だんだん、昨日のことや本当に昔のこと、そしてついには小学校で勉強したことすら覚えてられなくなつたんだ。」

「…。」

日も暮れですっかり暗くなつた空を見てハルヒトは言った。

「僕はもう、何も覚えれない。覚えたことを忘れていくだけだ。」

殻

ふとそんな言葉が浮かんだ。

ハルヒトは、殻になる。

「それでも、いいと思つたんだ。今まで十分生きてきたし。」「何言つて…」

俺の言葉をさえぎつてハルヒトはしゃべる。いつもそうだ。

「でも、違つた。僕は自分が思つていた以上に弱い人間だった」

そう言つてハルヒトは、俺のほうを向いた。

ふと驚いた顔になつてゐる。

「大丈夫だ、なにも死ぬわけじゃないんだから。」

ハルヒトはそういうてベッドの上から俺の頭をなでた。

「な、何して…」

「だから、泣くな。」

ハルヒトに言われてはじめて、俺は自分が泣いていたことに気がついた。

君は本当にバカだね、

その日は、家族5人で夜ごはんを食べた。ハルヒトの病気は入院するほどどの病気じゃなかつたから。

「ハルちゃんも京ちゃんも大きくなつたわねえ」

母さんに会うのは半年ぶりくらいだ。

「母さん、英語ペラペラになつた?」

「それがねえ、向こうでも9割ジエスチャーで生活してきたのよおつおほほ・・・」

母さんは、俺ら家族の中で飛びぬけて明るい。そんな母さんを見て父さんはにっこりしている。

そして母さんはハルヒトを見て言った、

「ハルちゃん、これからはお母さんたちも一緒に暮らすから。」優しい声だった。

「別にかまわないが」

桜は目が真つ赤だつた。

俺もだつた。

その後病室で大泣きした僕は、俺よりハルヒトのほうがよほど大人だなあ、と思つた。

そして俺が泣き終わつた後には頭をくしゃくしゃつとなでて『君は本当にバカだね』つと言つたんだ

『僕のために泣くなんて、馬鹿だ』と

天体観測。

5人で食べたご飯は美味しかった。

ハルヒトの病気がなければ最高だつたのに

その夜、ハルヒトは屋根の上にいた。

電柱に登るくらいだ、前もこうやって屋根の上に来ていたのだろう。

「ハルヒト」

後ろから呼ぶとハルヒトがはつとなつて振り返つた。

「なんだ、キミか」

ちつ

毒舌だけは忘れないようだな、こいつは。

そう思いながらも俺は座っているハルヒトの横に立つた。

「オリオン座」

ふとハルヒトが言った。

夜の町は静かすぎるくらいで、小さなハルヒトの声でも聞こえた。

「あれ、オリオン座」

そういうつて指をさす。

俺には星がたくさんありすぎてわからない。

必死に探す俺を見て、ハルヒトはくすくすと笑つた。

「人間はさ、昔できなかつたことを成し遂げるために生まれてくるんだ。誰もが、絶対。」

始まつた。ハルヒト論。

「そしてまた悔いを残して死んでいく。」

俺は黙つて聞いていた。

オリオン座はいまだ見つからない

「こうやって星を見てるとさ、気分が落ち着かないかい？」

「ああ・・・」

じめじめとする、夜に

俺らは屋根の上で2人星を見ていた。

さつとハルヒトにはオリオン座のほかにも星が見えていたのだろう。

「僕はや、この星を君に見せるために生きてきたんだ」
何を。

もう悔いはない」というような言い方をするな。

「だから君も・・・」

俺はそこで我慢できなくなつてどなつた。

「黙れっ」

静かすぎる夜にその声は響いていた。

「もう、わかつたから。星のすごいこと」。だから・・・

それまでじつと俺の顔を見上げていたハルヒトはふつと嘲笑氣味に笑つて言つた。

「やうだな、わかつてもらえればそれで十分だ」

ハルヒトさつと、忘れてしまわないといつひと言つておいつと思つた
んだ。

自分が生まれてきた理由を。

あまりにも悲しすぎる理由だつた。

秋の風、君のこと。

もう、秋の風が吹いてきた。

あれから、確実にハルヒトは記憶を失っていた、
学校は、授業について行けない、と退学した。

しかし本人いわく星のことだけは覚えているらしい、
星のことは最後まで覚えてられたらいいな、と言つていた。

俺はといふと、家事は母さんがやつてくれるし、ハルヒトの毒舌も
あまり聞かなくなつて、心に穴が開いた感じだ。
桺は受験に向かつて頑張つている。

その心の穴を埋めるために俺は今まで以上にサッカーに没頭した。
休日は必ずと行っていいほど家の裏の空き地に行き、ボールをけつ
た。

そしてその様子をハルヒトが見る、といつ過ごし方が定番になつて
いた。

ハルヒトはもう、俺がやつているスポーツの名前もわからない。
自分の年はもちろん、名前すらも覚えてないんじゃないだろうか。

でも、星は必ず見ていた。
夜、毎日。

それが唯一の楽しみだったようだ。

そして俺も付き添つてゐるうちにだいぶ分かるようになつて行った。
少なくとも、オリオン座がとても見つけやすい星だったということ
はわかつた。

そう、彼がほほー口の中なかひつたままでま...。

最 後 の 兄 。

ハルヒトは一日中寝るよつになつた。

たまに起きてもボケーつとしているだけだ。

何かを食べることも、何かを飲むこともない。
どんどん弱つて行つた。

俺はとこりと冬になつて寒いしサッカーは控えて、家でハルヒトの隣で勉強するのが日課になつていた。

もともとバカだった俺は、いまさら勉強を頑張つたところで全くわからない。

今日もまたたくわからぬ問題に頭を抱えていた。

その時だ

「 その答えは2だよ

え?

もちろん、部屋にはハルヒトと俺しかいない。

おそるおそる横に寝ているハズのハルヒトを見る。

ハルヒトは上半身を起こしてベッドの上から俺の問題を見ていた。

「 ハルヒト……お前……」

寝てなきやダメだろ、って言おつとして言いとどまったく。まずハルヒトの声を久しぶりに聞けてうれしかつたから、それからなんだかもつこの声が聞けるのも最後なんぢゃないか、と思つたから。

「 そんなの初級の問題ぢゃないか。」

だって俺は基礎ができないから、ハルヒトとは脳みその作りが違うから、

そう言いたいのに言葉がでない。

そうしてる間にもうハルヒトの毒舌は終わっていた。

そして嬉しそうに笑うと

「君は本当にバカだね、」

つて言つたんだ

最 後 の 兄 ？

それから俺はわからない問題を全部ハルヒトに教えてもらつた。
ハルヒトはいとも簡単に、解説付きですらすら教えてくれた。
そんなハルヒトを見ながら、記憶が戻ってきたんじゃないか？と疑つてしまつほど。

「もうわからない問題はないかい？」

最後の問題の解説が終わつて、ハルヒトが言つた。

「あ、ああ・・・ありがとな やつぱ脳みその作りがちげえな」

俺はハルヒトの記憶に戸惑いながらも、本当に感心していたから言った

「でも僕にはサッカーは出来ない。他のスポーツも同様だ」「サッカーのことを覚えていたのか、ハルヒト。

俺らはそれから夜通しでしゃべつた。

夕飯を持ってきた母さんは喜びながらハルヒトにしゃべりかけていたけど、ハルヒトは俺と2人でしゃべりたいと言つて母さんはふてくされて居間に戻つて行つた。

「桜は…」

ハルヒトが言つた。

「受験でそろそろ忙しいからな、上で勉強頑張つてるよ

「そうか」

「こんな寒い日は、星がきれいなんだろうなあ

ハルヒトが天井を見ながら言つた。

「風邪ひくからダメだぞ」

俺は一応言つておいた。

ハルヒトはまるでおもちゃを買つてもうえなかつた子供のよつな顔をした。

「僕は……」

いやな予感がした。

もうすぐ、ハルヒトがアツチへ逝つてしまつような、そんな予感。

「僕は兄として何もしてやれなかつたな」

「兄つて言つても双子なんだから、俺ら」

俺はいやな予感を振り切つてしゃべつた。

大体、俺の力カンは外れるんだから

「さつき、問題見てくれたのすげえ助かつたし。」

いつもなら言わないようなことを俺は言つた。

ハルヒトは少し驚いて、「そうか」と言つた。

「なんだか今日は氣分がいいよ」

ハルヒトは目を閉じて言つた。

「僕はそろそろ行かなきやいけないらしい。こんなに記憶が戻つ

ているのは一時のものだからね」

やめてくれ。

そんなこと言わないでくれ。

「ただ一つ心残りがある。

京介、君と一緒に大人になりたかったよ
そういうつてハルヒトは静かに

。

れぬなり、
(前書き)

最終回でーす

さよなら、

あれから、5年がたつた。

桜は無事高校に合格、大好きなバレーに打ち込んでいる

俺 京介 は、大学に行く気にもなれず、（正確には行けなかつた）

高校卒業でもなれる警察官になつた。

幸い、体力だけはあつた。

ただそれでもまだ足りないから毎日のトレーニングは欠かせないが。

ハルヒトがいなくなつてからの俺は、案外元気だつた。

ただサッカーボールを見ると辛いから、ハルヒトが逝つて以来サッカーはしていない。

勉強はハルヒトに教えてもらつた問題は1問しか出なくて、結局点数は変わらなかつた。

でもその1問だけは完璧にとけたから、満足だ

いつか、ハルヒトが言つていたな。

人は生きる理由があるから生まられてくる、つて

そして絶対悔いを残して死んでいく、つて。

ハルヒトの悔いは、俺と一緒に大人になれなかつたこと。

そして生きる理由は、俺がわからない問題を教えてやることだったらしい。

ハルヒトの部屋の片づけをしてた時に見つけた日記の最後のページに書いてあつたらしい。

俺はその話を聞いたとき、おもわず上を向いて「バカやろ?」って言った。

ハルヒトの毒舌が聞けない毎日は、ひどく寂しいものだった。

産まれてから毎日隣にいたやつが、いきなり空気になつたんだから、あたりまえだ。

でもくよくよはしてられなかつた。

その代わりと言つては何だが、俺は毎日屋根の上に行つて星を見た。寂しさを埋めるため、そしていつの日かハルヒトに会えることを願い。

その日は、夏の暑い日だつた。

にもかかわらず、見えないハズの星が見えた。

「お、オリオン座……。」

後から知つたことだが、オリオン座は夏には見えないらしい。なのに、見える。

俺にはハツキリすぎるのはうらうい見える。

「ああ・・・わかつたよハルヒト

俺の生きる理由。

ハルヒトの分まで、大人になること、そして俺はハルヒトの分の悔いを残さずに死ぬ。なんたつて俺らは双子なんだから。

今では見えなくなつたオリオン座があつた空を見上げ、俺は決心した。

おわり

わかなり、（後書き）

なかなか自分が思った通りにまとめられませんでした（涙）、
でも楽しかったでーす
でわ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8840y/>

俺達が生きる理由。

2011年12月1日18時45分発行